

わが

「大自然のシンフォニー」 文化・交流のまち 黒部」を目指して

清流黒部川に育まれた 名水の里

黒部市は、富山県の北東部に位置し、3km級の北アルプスの高峰から、秘境黒部峡谷とその雄大な自然を望む湯の街宇奈月温泉、清流黒部川の恩恵に恵まれた肥沃な里山地域、名水百選に認定されている黒部川扇状地湧水群、さらには天然のいけすといわれる水深千mの富山湾まで、山・川・里・海が一体となった豊かな自然環境と観光資源を有する、バランスの取れたまちです。



日本屈指の規模を誇る「黒部川扇状地」



全長約20kmの「黒部峡谷鉄道トロック電車」

また、本年3月14日に開業5周年を迎えた北陸新幹線の黒部宇奈月温泉駅を有する本市は、ビジネスや観光、文化・芸術の振興、産学官連携の取り組みなどにおいても県東部の玄関口として、さらには国際山岳観光の玄関口として、交流人口の増加とさまざまな分野にわたる発展の可能性があると考えています。

「健やか・展やか・朗らか」 黒部の創造

一方で、全国的な構造的課題である人口減少および少子高齢化に直面する中で、「雇用の創出」「交流の促進」「結婚・子育て」「快適な暮らし」をキーワードに「黒部市総合戦略」を平成27年度に策定し、推進しております。そのような中、本市に製造と技術拠点を有する世界的企業が、東京から本社機能を一部移転したり、次世代型居住環境の整備による新たな魅力ある街並みの創出を図るなどの取り組みもあって、平成27年度から29年度にかけて、転入が転出を上回る社会増となりました。さらなる「健やか・展やか・朗らか」黒部の創造のため、本年度からは「多様性」「共生」「生きがい」

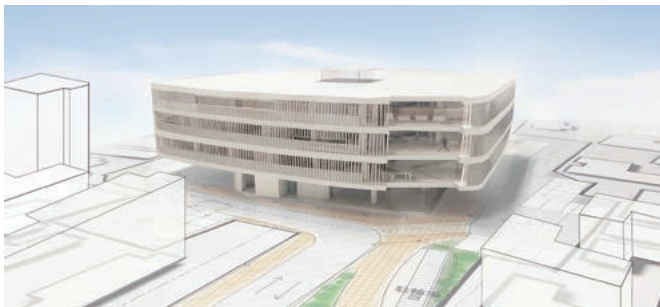
を要素に加え、誰もが活躍でき、輝き続ける地域社会を実現させ、「人生100年時代」を見据えた新たなステージへの展開を図ります。具体的には、黒部峡谷から黒部ダムまでを結ぶ関西電力黒部ルートの一一般開放を契機とする、山岳観光の新たな魅力の創出、U I J ターインの促進など移住・定住施策の充実、防災対策・公共交通の整備を通じて安全で安心な暮らしの保障といった「持続可能なまちづくり」を主眼に取り組みます。中でも将来にわたる地域活力の創出への投資として、次の二つのハード事業を重点的に整備してまいります。

道の駅「KOKOKUROBE」

県を横断する国道8号の沿線に、道路利用者に癒やしと快適な休憩機能を提供するとともに地域振興に貢献する交流施設を目指した、道の駅「KOKOKUROBE」が令和4年春に開業予定です。「KOKO」には「ここから黒部市が



令和4年春に開業予定の道の駅「KOKOくろべ」



図書館を核にした拠点施設「(仮称)くろべ市民交流センター」

ますます発展してほしい」「ここは黒部です」という意味が込められていて、全国から頂いたたくさんのご応募の中から、本年7月に名称を決定しました。

約3・0 haの敷地には、駐車場やトイレのほか、フードコート、地元農産物直売所、キッズフロアなどを設けた地域振興施設、屋外には築山や遊具などを併設します。直売所を設けることで、生産者と消費者をつなぎ、地産地消の促進と地域ブランドの確立を図ります。

隣接地には民間の温浴施設が建設予定であり、日々の疲れを癒やしながら、黒部の恵みを楽しんでいただき、親しみを込めて「KOKOへ行くこう」と多くの方に立ち寄っていただける道の駅になることを願っています。

(仮称)くろべ市民交流センター

災害・防災対策本部としての機能も充実させた市役所新庁舎が平成27年度に開庁し、旧庁舎跡地の利活用については、新しい図書館建設構想を皮切りに、これまで10

年近い議論がなされてきました。現在、「(仮称)くろべ市民交流センター」として、図書館を核に、子育て支援センター、市民会館などの機能融合を図り、本市の新たな価値創造の拠点となる施設として、令和5年春の開館を目指しています。

平成31年3月に策定した管理運営計画では、メインコンセプトを「わたしの『サイドプレイス』」とし、家でも学校や会社

でもない、誰もが気軽に集まれ、多様な価値観を認め合いながら心地良く過ごすことができる「第3の居場所」の提供を目指すこととされています。

また、センター周辺は、新たなにぎわい空間として、近隣住民や利用者の安全性や利便性を最大限に考慮しながら、自然の中で人が

プロフィール

- ◆ 面積 427・96 km²
- ◆ 人口 4万925人
- ◆ 世帯数 1万5722世帯

〔将来都市像〕 大自然のシンフォニー文化・交流のまち 黒部

〔まちの特徴〕 山・川・里・海に至る類いまれな自然を背景に企業立地や公共交通、防災機能などの都市機能のバランスが取れたまち

〔市町村合併〕 平成18年3月31日 黒部市、宇奈月町が合併し、新黒部市が誕生

〔特産品〕 黒部名水ボーク、かまぼこ、



黒部市長
大野久芳

行き交い、活気あるまちなか形成ができるよう整備してまいりたいと考えております。

これらのほか、各種施策の推進と市民と行政の協働によるまちづくりを引き続き実行し、将来都市像「大自然のシンフォニー 文化・交流のまち 黒部」の実現に向け、取り組んでまいります。

昆布、黒部米、白ネギ、清酒、宇奈月ビール、ジビエ料理など

〔観光〕 黒部峡谷、宇奈月温泉、僧ヶ岳、黒部川扇状地湧水群、くろべ牧場まきばの風、石田浜海水浴場など

〔イベント〕 明日の稚児舞（4月）、くろべ牧場まきばの風ファーム・フェア（5月）、カーター記念 黒部名水馬拉ソン（5月）、愛本姫社まつり（6月）、えびす祭り・くろべ生地浜海上花火大会（7月）、生地たいまつ祭り（10月）、宇奈月温泉雪のカーニバル（2月）



※面積は国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」に、人口・世帯数は「住民基本台帳」による。

わが

笑顔で「住みたい」「住み続けたい」まちを目指して

湖と大地が織りなす豊かな恵み

行方市は、茨城県の東南部、都心から約70kmの距離に位置し、東は北浦、西は霞ヶ浦（西浦）という二つの大きな湖に面しています。湖岸の一部は水郷筑波国定公園に指定され、遠くには筑波山や



サツマイモ畑が一面に広がる肥沃な行方台地

富士山を望むことができる美しい自然景観を有しています。さらには、常陸国風土記にも記載があり、いにしえの先人から脈々と受け継がれてきた風土、気質、

伝統文化は、「千年村プロジェクト」による認証を受けています。

また、湖に囲まれた温暖で肥沃な台地は湖岸線も長く、農業・畜産業・水産業が盛んで、四季を通して60品目以上のさまざまな農産物が生産されています。特に、サツマイモは、農林水産祭天皇杯を受賞するなど、日本一の品質を誇っています。

地域資源を生かす、情報発信日本一への取り組み

本市は、本年9月に市制施行15周年を迎えましたが、人口は合併時に比べて約6千人近く減少しました。地方部において人口減少は避けることのできない道ですが、それを悲観するのではなく、他にはない「行方ならではの価値」を見出し、市民がそれらを共有するこ

とで、人口が減っても市民が本市に住むことへのさらなる自信や愛着心を持つものと考え

ています。



なめがたエリアテレビ「子ども放送局」

そこで、本市は、産業、歴史・文化などの地域資源を徹底的に掘り起こし、それらを生かす独自の取り組みを始めました。その手段として非常に有効であるのが、防災対応型エリア放送「なめがたエリアテレビ」の開設です。エリア放送とは、市内各所に設置した防災無線からワンセグ・フルセグの電波を発信し、各家庭のテレビやスマートフォンなどで視聴できる、市内限定の市民向けテレビ放送

です。

近年、各地で多発している自然災害への防災・減災対策の一環として、避難情報など緊急性の高い防災情報をいち早く市民に届けることが目的でありますが、その汎用性を生かし、平常時は市政、議会中継、地域コミュニティ、公共交通や商店街の情報など、地域に密着した情報を番組として放送しています。これら情報発信の基本は「住民参加型」です。市民が主体となって情報を発信することで、市政に対する興味・関心が高まるとともに、市政への積極的な参画や地域の新たな価値が生まれています。

「なめがたブランド」の確立を目指して

本市の基幹産業である農業は、県内2位の産出額を誇る一方、従事者の高齢化や担い手不足などによる衰退が懸念されています。そこで、本市の農業が「ビジネス」として儲かる仕組みを構築し、産



霞ヶ浦の湖面を優雅に走行する帆引き船



特産品のサツマイモを使用した6次産業化商品

政で構成する「なめがたブランド戦略会議」を立ち上げ、消費者のニーズや趣向に即応し、他産地との差別化や商品価値の高い農産物などの地域資源を横断的にブランドディングしていく取り組みを実施

地としてのブランド力を付けることで、付加価値を高めていく「6次産業化」を推進していきます。

現在、生産者や団体、行

してきます。このほか、平成27年に、民間事業者により、学校跡地を活用した6次産業化施設「なめがたファーマーズヴィレッジ」も開設されています。

本市の農業の発展は、地域の活性化にとどまらず、ひいては日本の農業の未来を支えることにつながると考えています。今後も6次産業化と同時に、さらなる本市のPRを推進し「なめがたブランド」を確立することで、これまでに築いてきた有機的なつながりをうまく活用しながら、魅力的な地域づくりを次なるステージへ進めていきます。

みんなで進めるまちづくり

まちづくりの全ての過程において、欠かせないのは「人財」です。本市の魅力が一番よく知っているのは市民ですが、普段目の前に広がる風景や文化などは「日常」として当たり前に映るので、なかなかその魅力に気付きません。これからは市民が自らの地域を知り、そして、良さに気付くことで、その魅力を市内外に積極的に発信していく取り組みが必要です。そう

することで、本市が魅力ある地域である、という認識が向上するものと確信しています。

合併から15年を経て、行方は一つの市として、さまざまな変化と向き合い進展してきました。新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、東京一極集中が見直され、新しい時代の到来が予測されている中、未来を担う子どもたちが地元への愛着心と誇りを持てる

プロフィール

- ◆ 面積 222.48 km²
- ◆ 人口 3万3963人
- ◆ 世帯数 1万2987世帯

〔将来都市像〕笑顔で住み続けたいまち、行方

〔まちの特徴〕霞ヶ浦・北浦と行方台地の恵みを享受し、千年以上にわたる持続的な産業と生活を発展させてきたまち

〔市町村合併〕平成17年9月2日、麻生町、北浦町、玉造町が合併



行方市長 鈴木周也



〔特産品〕サツマイモ、わさび菜、イチゴ、チンゲンサイ、レンコン、みず菜、せり、春菊、エシャレット、香菜

〔観光〕霞ヶ浦ふれあいランド 虹の塔、あそび温泉 白帆の湯、三味塚古墳公園、なめがたファーマーズヴィレッジ

〔イベント〕行方ふれあいまつり、サンセットフェスタ IN 天王崎、観光帆引き船運航、麻生祇園馬出し祭り、茨城100kウルトラマラソンin鹿行

ように育んでいく「人財づくり」が今後ますます重要になってきます。地元への愛着心と誇りを持つ子どもたちが、進学などで地元を離れても、安心してUターンし、就職、結婚・妊娠・出産・子育ての希望をかなえることができる、「住みたい」「住み続けたい」まちづくりを、市民、地域、行政など、あらゆる主体の協働で進めていきます。

※面積は国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」に、人口・世帯数は「住民基本台帳」による。

わが

「勇健都市あま」未来へ動く！
—今を生きる市民のため、未来を生きる若者のため—

歴史と伝統を受け継ぐ
あま市

あま市は、愛知県の西部に位置し、広大な濃尾平野とそこを流れる河川の恩恵を受けて、近郊農業を中心に発展してきましたが、近年は名古屋市のベッドタウンとしても発展しております。名古屋市の中心部から公共交通機関で約15分という立地条件にありながら、田園風景と住宅地との調和が取れ



本市に現存する最も古い木造建造物「甚目寺観音南大門」



福島正則公の菩提寺である「菊泉院」

た緑豊かなまちを形成しています。

この地域の歴史は古く、市内からは弥生時代中期の遺跡も発掘されています。そして、市内には寺社や史跡が散在するとともに、甚目寺観音での「節分会」や萱津神社での「香乃物祭」、蜂須賀蓮華寺での「二十五菩薩来迎会」など、伝統文化が数多く残されています。また、戦国時代に活躍した武将蜂須賀小六正勝公、福島正則公をはじめ、7人ものお大名を輩出した歴史のまちでもあります。

あま市制10年のあゆみ

平成22年3月22日に、七宝町・美和町・甚目寺町の3町の合併により、あま市として新たなスタートを切り、本年3月に10周年の節目を迎えることができました。平成27年には、市の限らない発

展を願い、市の花「ゆり」と市の木「ハナミズキ」を決定しました。

また、市民の健康づくりを担う新市民病院が開院し、災害時にも地域の中核病院として暮らしを守る施設となっています。令和元年6月、天皇、皇后両陛下がご即位後初めての地方訪問で、市の伝統的工芸品「七宝焼」を伝承する「あま市七宝焼アートヴィレッジ」を訪問されました。また、同年9月には子どもたちに安全安心な給食を提供するため、新学校給食センターの供用を開始しております。そして、本年は市制10周年を記念して、あま市のシンボルマーク（愛称…あまじるし）とあま市の歌を作成しました。あまじるしは、公募の中から市を象徴するものとして、市民の皆さんに愛される作品を選定しました。あま市の



市制10周年を記念して作成したシンボルマーク「あまじるし」

歌は、自然と口ずさみたくなるような歌詞としました。これらを活用して、これから市の魅力をより効果的に発信していきたいと思えます。さらに現在、令和5年5月の開庁を目標に新庁舎整備を進めており、10年先、20年先を見据え、今を生きる皆さんと将来を担う子どもたちのため、「勇健都市あま」の実現に向けて、まちづくりに取り組んでいきます。

勇健な未来都市づくり

「人・歴史・自然が綾なすセーフティー共創都市『あま』」を将来像とした第1次あま市総合計画を策定し、地域の力を結集する「パートナーシップ」、人と人との「絆」、



伝統的工芸品「七宝焼」を伝承する「あま市七宝焼アートヴィレッジ」

さまざまな主体の「交流と連携」を大切にした協働のまちづくりを次の五つの目標に掲げて進めています。さらに、現在整備中の新庁舎とその周辺地域を新たな連携拠点と位置付けて、行政機能、防災機能、交流機能を集積させ、これらの機能を市域全体に波及させていきます。

①安全が確保され、安心で快適に暮らせるまち

消防・救急体制、防災対策を強化し、防犯・交通安全対策などは地域と協力し、安全が確保された生活環境の実現を目指します。ま

た、計画的なまちづくりを推進するため、生活環境や交通網を整備し、快適に暮らせるまちづくりを進めます。

②心身共に健康で、生き生きと暮らせるまち

市民一人ひとりの健康づくりを支える保健、医療サービスの充実、市民の皆さんの多様なニーズに対応できる福祉の充実、心身の健康に大きな影響を与える自然環境保全への取り組みの強化などを通じて、健康で生き生きと暮らせるまちづくりを進めます。

③郷土に誇りと愛着が持てる、魅力あるまち

地域に受け継いだ多くの歴史・文化資源を大切に保存・継承するとともに、郷土に誇りと愛着が持てる心の醸成と、魅力あるまちづくりを進めます。また、これらの魅力を発信するシティプロモーションによる地方創生を進めます。

④自らの力で歩み続ける、活力のあるまち

活力あるまちづくりには、商工業、農業、観光など各産業の振興が必要です。大都市に近接する地理的条件を生かし、新産業の発掘、既存産業の高度化と活性化、

企業誘致、新規創業を推進し、雇用機会の創出や就業環境の整備を進めます。また、行政運営の効率化、財政の健全な運用などにより、自らの責任と力で発展し続ける、活力あるまちづくりを進めます。

⑤交流と連携による、一体感のあるまち

あま市としての一体感を形成するためには、地域住民、企業、ボ

ランティア、NPO団体、行政などが相互に交流・連携しながら、まちづくり全般に主体的に関わる事が大切です。

市民一人ひとりが自覚と責任を持ってまちづくりに参画し、力を発揮できる場づくり、お互いを尊重し合える人権意識の高揚と男女共同参画の推進、地域間交流や国際交流を推し進め、主体的で一体感のあるまちづくりを進めます。

プロフィール

- ◆ 面積 27・49km²
- ◆ 人口 8万8980人
- ◆ 世帯数 3万7381世帯

〔将来都市像〕人・歴史・自然が綾なすセーフティー共創都市、あま。

〔まちの特徴〕名古屋市のベッドタウンとしても発展し、田園風景と住宅地との調和が取れた緑豊かなまち

〔市町村合併〕平成22年3月22日、七宝町、美和町、甚目寺町の3町が合併



あま市長
村上浩司



〔特産品〕小松菜、ほうれんそう、ミズナ、ミブナ、越津ネギ、方領大根、ニツ寺大根、かぶとまい(米)

〔観光〕あま市七宝焼アートヴィレッジ、甚目寺観音、萱津神社、蜂須賀蓮華寺、菊泉院

〔イベント〕あまつり、イルミネーションフェスタinあま、香乃物祭、下之森オコワ祭り

※面積は国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」に、人口・世帯数は「住民基本台帳」による。

わが

希望の街・下関
改革への挑戦

海峡の街・下関

下関市は、本州と九州および大陸との接点でもある地理的条件から、内外の交通の要衝として古くから栄え、商工業、港湾、農業、水産観光都市としての多面的性格を併せ持つ、県内最大の都市です。

また、日本三大急潮流に数えられる関門海峡を挟んで対岸に位置する北九州市とは1日当たり約1万人の行き来があり、密接な経済圏を形成しています。

歴史的背景においては、日本が武家社会へ転換する契機となった源平最後の対決「壇ノ浦の合戦」や、明治への大きな転換期の始まりとなった「下関(馬関)戦争」が起こるなど、日本の歴史の節目に本市が登場してきました。その他にも、武蔵・小次郎決闘の地「巖流

島」^{じま}、維新の志士・高杉晋作拳兵の地「功山寺」^{こうざんじ}があるほか、坂本龍馬がついすみかとして居を構え、愛妻お龍と共に過ごすなど、本市においてさまざまな歴史が繰り広げられました。

ふくの本場 下関

本市を代表する味覚といえ、ふぐ。福を招くよう、本市では「ふく」と呼ばれます。



ふぐの本場下関のどらふぐ刺身

の安全・安心を高める取り組みを先導的に進めています。

くじらの街 日本一の推進

本市は古くからくじらとの関わりが深く、今から2千年以上も前(弥生時代中期頃)の遺跡から、くじらの骨でできた道具が出土しています。

北前船の寄港地であった江戸時代には、近隣で捕獲されたくじらの肉・油などが、関西、北陸に送られていました。

明治時代には、船に積んだ捕鯨砲でくじらを捕獲する近代式(ノルウェー式)捕鯨に変わり、日本で初めての近代式捕鯨会社の出張所が本市に置かれたことから、近代捕鯨発祥の地と呼ばれています。

太平洋戦争後、本市は捕鯨会社の南水洋捕鯨基地、鯨肉の流通・加工基地として、水産都市下関発展の一翼を担ってきました。本市が誇る「くじら文化」を次世代に引き継ぎながら、かつてのにぎわいをくじらで取り戻すため、年間

本市とふくの関係には長い歴史があります。市内の貝塚からふくの骨が見つかり、2千年以上前からふくが食べられていたことが明らかになりました。戦国時代に豊臣秀吉が最初にふく食を禁じたのも、明治時代、初代内閣総理大臣・伊藤博文がふく食を解禁したのも本市でした。

全国で唯一ふくを専門的に取り扱う卸売市場である南風泊市場^{なまどまり}には、「天然ふく」「養殖ふく」が国内各地から集荷され、毒を除去する「磨き(身欠き)」という加工をし、全国へ出荷されています。平成28年10月に「下関ふく」の名称が、地理的表示(GI)として国に登録され、品質においてもお墨付きを得ることができました。

今後も海外への販路拡大に向け、事業者と一緒にふく食



多くの観光客を魅了する角島大橋

10万食の鯨肉給食の実施、捕鯨母船「日新丸」の母港化への取り組み、「全国鯨フォーラム2020 in下関」の開催などにより、「くじらの街 日本一の推進」に取り組んでいます。

市街地のにぎわい創出

本市では地形的・産業構成要素などにより、全国平均を上回るスピードで人口減少が進んでいます。そのため、第2期下関市まち・ひと・しごと創生総合戦略を策定し、人口減少に歯止めを掛けるとともに、人口減少下においても活力を失わないまちづくりを進めています。



日本最大級のペンギン展示施設がある海響館

特に、中心市街地である関門海峡エリア沿いに、「食・文化・芸術・景観」などの資源を生かした魅力あるスポットを構築し、周遊・滞在型観光地を目指す「まちの魅力再発掘プロジェクト」の取り組みを進めるほか、(株)星野リゾートと下関港ウォーターフロント開発に係るホテル事業の基本協定を締結し、早期開業に向けた協議を進めています。

また、魅力あるにぎわいスポットの構築(点)に合わせ、それらを線や面へつなぎ、回遊性を高め、新たな人通り(動線)を創出し、観光客などが「歩いて楽しめる」エリアとする下関オリジナルの手法、「下関モデル」を開発する

ため、リノベーションまちづくりを活用した新たな人通りの創出にも取り組んでいます。

安全・安心なまちづくり

世界的に猛威を振るっている新型コロナウイルス感染症により、本市においても企業活動はもとより、市民生活にも多大な影響を及

ぼしております。

これまで経験したことのない未曾有の脅威に対し、市民の安全・安心を第一に考え、適正に対処していかなければなりません。

そのためには、常に新たな発想による取り組みや行動力を持って、市民の皆さまと一緒に、この難局を乗り越えていきます。

プロフィール

- ◆ 面積 716・10 km²
- ◆ 人口 25万8803人
- ◆ 世帯数 13万239世帯

〔将来都市像〕まちの誇りと自然の恵みを未来へつなぐ、輝き海峡都市・しものせき

〔まちの特徴〕本州の最西端に位置し、関門海峡、周防灘、響灘と三方が海に開かれた自然と文化に恵まれた海峡と歴史のまち

〔市町村合併〕平成17年2月13日、下関市、菊川町、豊田町、豊浦町、豊北町が対等合併



下関市長
前田晋太郎



〔特産品〕ふく(ふぐ)、うに、くじら、いか、あんこう、瓦そば、巖流焼、赤間関硯、とんちゃん鍋

〔観光〕海響館(下関市立しものせき水族館、角島大橋、関門海峡、巖流島、赤間神宮、日本遺産(旧下関英国領事館ほか)、城下町長府

〔イベント〕しものせき海峡まつり、維新・海峡ウォーク、ツール・ド・しものせき、関門海峡花火大会、馬関まつり、下関海響マラソン

※面積は国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」に、人口・世帯数は「住民基本台帳」による。